

アカニシと貝紫染料



●コレクション・データ
 時代 弥生時代中期
 調査 唐古・鍵遺跡 第20次調査
 発見年 1985年
 大きさ 残存長 9.4 cm
 残存幅 7.6 cm
 展示位置 「交流と戦い」

内陸部に位置する唐古・鍵遺跡ですが、大阪湾をはじめとする海岸部で採取されたと推定されるアカニシやウニ、クジラ、ハモ、エイ、サメ、タイなどの殻や骨が出土しています。これらは主に食料として唐古・鍵遺跡にもたらされたと思われるのですが、アカニシに関しては別の用途もあり注目されています。

アカニシは内湾の砂泥底に生息する肉食の巻貝で、漁師の間ではカキやアサリを食い荒らす天敵とされています。一般にはあまり知られていませんが、有明海や瀬戸内海、三河湾、東京湾などの地元では食材として流通し、特に刺身は美味とされています。

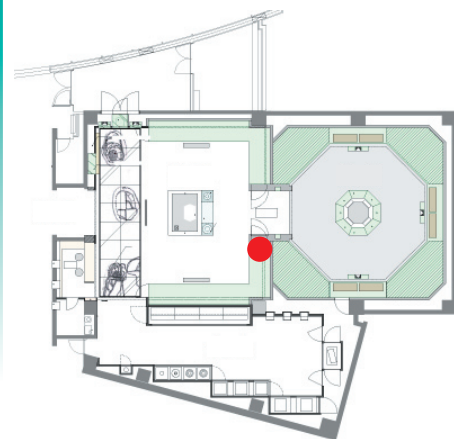
注目されるのはアカニシやイボニシなどのアキガイ科の巻貝にある鰓下腺（パール腺）です。この鰓下腺の分泌液が紫色の染料になります。佐賀県吉野ヶ里遺跡で出土した絹布片には紫色の痕跡が認められ、染料の候補としてアカニシが挙げられています。貝による染色（貝紫）

は古代ローマの例が有名ですが、弥生時代にも同様の技術が存在した可能性があるので。

さて、貝紫の簡単な染色（直接法）はアカニシの貝殻の側面を割り、薄黄緑色を呈した鰓下腺を取り出し、海水を混ぜ磨り潰し染液とし布などに塗りつけます。その後、直射日光（紫外線・酸化）にさらすことによって紫色に変色します。

唐古・鍵遺跡から出土したアカニシも貝殻の側面が壊れており、鰓下腺を取り出した可能性があります。また、井戸からト骨などの祭祀遺物と一緒に数個体まとまって出土する例もあり、特別な扱いを受けていたようです。

このように海産物の移動は食料の獲得による海岸部との交流を示すだけでなく、工芸的な目的を動機とするものもありそうです。発掘調査では、ほとんど色の情報が失われていますが、唐古・鍵の弥生の人々の衣装にも赤紫色を再現できるかもしれません。



ミュージアム上面図と展示位置